

# 令和7年度 スポーツ文化共創「つながる」プロジェクト事業 「国内外スポーツミュージアム事例調査」報告書



令和8年1月

独立行政法人日本スポーツ振興センター  
秩父宮記念スポーツ博物館

## はじめに

令和7年度、独立行政法人日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館を中核館として、中京大学ミュージアム、わかやまスポーツ伝承館、日本オリンピックミュージアム、札幌オリンピックミュージアム、野球殿堂博物館が連携し、「スポーツ文化共創『つながる』プロジェクト」を実施することとなった。本プロジェクトは、日本のスポーツミュージアムが抱える課題をネットワークで補完し、スポーツ文化を共創し、つながる仕組みを構築することを目的とするものである。

秩父宮記念スポーツ博物館は、平成27～29年度および令和2～3年度に文化庁補助事業を通じて、スポーツミュージアム間の連携を推進するプロジェクトを実施してきた。これらの事業では、シンポジウムやワークショップを開催し、情報交換や共同事業を通じて、これまで接点のなかった館同士の連携を実現するなど、一定の成果を上げることができた。しかし、その過程で、スポーツミュージアムには専門職員が極めて少ないことが明らかとなり、①展示テーマやストーリーが固定的であること、②スポーツに関する記録や歴史の検証が不十分であること、③単館での収集活動に限界があること、という三つの課題が恒常的に存在していることが判明した。さらに、スポーツミュージアムと一口に言っても、運営形態や扱うテーマは選手顕彰、特定競技、オリンピック、スポーツ史全般など多岐にわたり、この多様性ゆえに、全国的な連絡協議会の設置やネットワーク化の具体的な見通しは課題として残っていた。

今回のプロジェクトでは、こうした課題を踏まえ、スポーツミュージアムのネットワークを新たに設立し、専門的知見を共有し、スポーツ文化を共創する仕組みを構築することを目指すものである。そのためには、諸外国の事例や国際的な動向を把握し、比較検討すること、さらに既存の国内ネットワークを調査することが不可欠である。今年度、ICOMの活動の一環であるICMAHにおいてスポーツミュージアムのワーキンググループが発足し、国際的な連携が始まったところである。こうした潮流に対応するためにも、諸外国の事例を調査し、国内で既に活動しているネットワークを参考にしながら、国内ネットワーク化を推進し、将来的な国際化も視野に入れる必要がある。

今回の調査では、諸外国の代表的なスポーツミュージアムに関する基礎情報やネットワーク活動の最新状況、さらに国内で活動実績のあるネットワークの現状把握に努めた。調査期間は短期間であったが、秩父宮記念スポーツ博物館として可能な限りの時間と労力を注ぎ、連携団体の担当者には積極的な協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表するとともに、本調査の成果が今後の国内ネットワーク活動の基礎資料として活用されることを期待するものである。

## 目次

はじめに .....	1
第1章 調査概要 .....	3
1. 調査目的	
2. 調査対象国	
3. 調査体制	
4. 調査方法	
第2章 諸外国におけるスポーツミュージアムの現状と調査結果 .....	9
1. アメリカ（コロラド）	
2. アメリカ（ニューヨーク）	
3. スイス（ローザンヌ）	
4. イタリア（ミラノ）	
5. オーストラリア（メルボルン）	
6. 韓国（ソウル）	
第3章 国内ネットワークの状況と調査結果 .....	35
1. アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク（愛称：プンカラ）	
2. 人権ネット（人権資料・展示全国ネットワーク）	
第4章 考察 .....	43
1. 諸外国の状況比較	
2. 国内調査を踏まえたスポーツミュージアム同士のネットワークの方向性について	
3. まとめ	
おわりに .....	47
1. 連携団体参加者からの所感	

# 第1章 | 調査概要

## 1. 調査目的

本調査は、諸外国の代表的なスポーツミュージアムに関する基礎情報とネットワーク活動の最新状況を調査するとともに、スポーツミュージアムへの社会的要求や質を確保する仕組みの実態を把握し、今後我が国におけるスポーツミュージアム同士のネットワークの在り方を検討するための基礎資料とすることを目的とするものである。

## 2. 調査対象国

調査対象国は、各国の代表的なスポーツミュージアムをピックアップし、その中からアメリカ（コロラド、ニューヨーク）、スイス（ローザンヌ）、イタリア（ミラノ）、オーストラリア（メルボルン）、韓国（ソウル）の5か国6カ所を対象とした。

なお、当初中国を対象国として調整していたが、先方の都合により訪問することが叶わなかった。

### <海外現地調査の概要>

No	調査国	メインとなるミュージアム	調査日
1	アメリカ (コロラド)	United States Olympic & Paralympic Museum (USOPM)	令和7(2025)年9月19日(金)
2	アメリカ (ニューヨーク)	National Baseball Hall of Fame and Museum	令和7(2025)年10月16日(木)
3	スイス (ローザンヌ)	The Olympic Museum (オリンピック・ミュージアム)	令和7(2025)年11月26日(水)
4	イタリア (ミラノ)	San Siro Stadium Museum	令和7(2025)年11月28日(金)
5	オーストラリア (メルボルン)	Australian Sports Museum	令和7(2025)年9月15日(月)
6	韓国 (ソウル)	NATIONAL SPORTS MUSEUM OF KOREA (大韓民国 国立スポーツ博物館)	令和7(2025)年10月30日(木)

## 3. 調査体制

本調査の実施に当たっては、秩父宮記念スポーツ博物館が事務局を務め、中京大学スポーツミュージアム、わかやまスポーツ伝承館、日本オリンピックミュージアム、札幌オリンピックミュージアム、野球殿堂博物館と連携して実施した。各連携団体のリソースとスポーツミュージアムネットワーク形成への寄与については、以下のとおりである。

#### <連携団体のリソースとスポーツミュージアムネットワーク形成への寄与>

- 中京大学スポーツミュージアム：研究知見  
スポーツに関する記録や歴史の情報検証に寄与
- わかやまスポーツ伝承館：スポーツ文化に関する地域コミュニティ確立  
来館者や資料提供協力者との関係構築の在り方を提案
- 日本オリンピックミュージアム及び札幌オリンピックミュージアム：IOCのオリンピックミュージアムネットワーク（OMN）加盟活動  
国際的なネットワーク活動の経験から、展示活動や本プロジェクトで立ち上げるネットワークの在り方を提案
- 野球殿堂博物館：殿堂活動による野球文化ネットワーク確立  
展示活動や日常的な関係団体や殿堂活動を行う海外との関係構築の在り方を提案
- 秩父宮記念スポーツ博物館：中核館としてのリソース  
複数の学芸員や司書の在籍、ICOM-ICMAHのワークショップ参加実績による海外スポーツミュージアムとのパイプ、スポーツミュージアムシンポジウムの実施から、中核館としてネットワークを取りまとめ、海外との連携を推進

団体名	調査国
中京大学ミュージアム	アメリカ（コロラド）
わかやまスポーツ伝承館	アメリカ（ニューヨーク）
日本オリンピックミュージアム	オーストラリア（メルボルン）
札幌オリンピックミュージアム	スイス（ローザンヌ） イタリア（ミラノ）
野球殿堂博物館	アメリカ（ニューヨーク）

※秩父宮記念スポーツ博物館は、事務局として各調査国へ同行した。

## 4. 調査方法

各国の状況については、博物館経営に不可欠な4つの経営資源（経営資源）から今回のプロジェクトの「つながり」をテーマにして以下の観点で調査を行った。

- ・ヒトに関すること（人材・組織・連携）
- ・モノに関すること（資料・収蔵・展示）
- ・お金に関すること（財源・資金調達）
- ・情報に関すること（知識・データ・発信）

調査は、事前に作成した調査票を基に、現地で担当者への直接ヒアリングを行う方法で実施した。調査票は英訳したものを事前に送付し、当日はその内容に沿って意見交換を行った。

<ヒアリングシート>

大項目	中項目	小項目
1. ヒト(人材・組織・連携)に関する こと	国内団体(オリンピック委員会、 競技団体等)、との連携	貴館は、どのような国内団体(例:オリンピック委員会、競技団体、自治体など)と連携していますか?その連携の目的や内容について教えてください。
	国際的な連携	国際的なネットワーク(海外の博物館や団体との連携)には参加されていますか?その内容や頻度について教えてください。
	民間企業との連携	民間企業との協力体制(スポンサー、CSR活動、共同イベントなど)はどのように構築されていますか?
	学校・地域との連携	学校や地域コミュニティとの関係性について、教育プログラムや地域連携の事例があれば教えてください。
	ボランティアの活用	ボランティアの活用について、どのような体制で運営されていますか?教育や資格制度、トラブル対応などの工夫があれば教えてください。
	研究者・アスリートとの連携	研究者やアスリートとの連携はありますか?展示監修やイベント、研究活動など、具体的な関わり方を教えてください。
	職員体制について	館内の職員体制について、学芸員の専門分野(資料、映像、書籍など)ごとの分担はありますか?また、運営と収蔵業務のバランスについて課題があれば教えてください。
	人事交流や人材派遣等の有無	他館との人事交流や人材派遣の制度はありますか?また、専門職員の育成や研修制度について、どのような仕組みがありますか?
2. モノ(資料・収蔵・展示)に関する こと	資料入手先、方法 (収集ネットワーク)	資料の収集方針について、どのような基準や方針で収集を行っていますか?
	寄贈・寄託の仕組み	寄贈・寄託の取り決めはありますか?それらの資料はどのように収蔵庫と紐づけて管理されていますか?
	資料貸借 (有料/無料、保険、頻度)	他館との資料の貸借は行っていますか?その際の条件(有料/無料、保険、頻度など)について教えてください。
	スポーツ関係資料の認定・登録 制度(文化財認定)	スポーツ関連資料の認定・登録制度(国等による文化財指定、またはそれに準じる制度など)はありますか?
	インクルーシブ対応	インクルーシブな視点(高齢者、障がい者など)を取り入れている事例があれば教えてください。
	体験展示	体験型展示について、どのようなテーマ・イメージで作成していますか?更新頻度についても教えてください。
3. カネ(財源・資金調達)に関する こと	国等からの補助金、助成金	国や自治体からの補助金・助成金はありますか?その内容や活用方法について教えてください。
	民間企業からの協賛、スポンサー 収入	民間企業からの協賛やスポンサー収入はどのように得ていますか?その資金はどのような活動に活用されていますか?

	寄付金の制度	個人や企業からの寄付制度はありますか？スポーツ文化を支えるための「人とお金」の両面からの支援体制について、どのような文化や仕組みがあるか教えてください。
	収益事業	収益事業（グッズ販売、イベント、体験プログラムなど）について、どのような取り組みをされていますか？収益向上のための工夫があれば教えてください。
4. 情報（知識・データ・発信）に関すること	他館と連携した研究・調査の有無	他館との共同研究・調査の実施状況について、テーマや成果、連携方法などを教えてください。
	メディアとの関係	メディアとの関係性について、恒常的な連携や情報発信の工夫があれば教えてください。集客や認知度向上への効果についても伺いたいです。
	デジタルアーカイブの連携状況	デジタルアーカイブの構築状況について、他館との連携や共通プラットフォームの活用事例があれば教えてください。
	デジタル資料に関すること	映像資料や最初からデジタル形式で作成された資料の収集・保存・整理について、どのような取り組みをされていますか？デジタル化の進捗や課題があれば教えてください。

## 第2章 | 諸外国におけるスポーツミュージアムの現状と調査結果

## 1. アメリカ（コロラド）

### （1）調査日

令和7（2025）年9月19日（金）

### （2）ヒアリング対象先／場所

United States Olympic & Paralympic Museum（USOPM）

#### <基礎情報>

USOPMは、コロラドスプリングスの「シティ・フォー・チャンピオンズ」開発プロジェクトの一環として建設され、2020年7月30日に開館した。館内では、Team USAのオリンピック・パラリンピック選手たちの軌跡を、誰もがアクセス可能な環境で体験できるよう工夫されている。インタラクティブな展示や革新的なディスプレイ、充実した収蔵品を通じて、来場者にオリンピックの価値である卓越・友情・敬意、そしてパラリンピックの価値である決意・平等・インスピレーション・勇気を伝えている。

国内のオリンピック・パラリンピック殿堂では、過去の伝説的選手を称えとともに、エンターテインメント性の高いアクティビティやイベントを通じて、未来の選手たちにインスピレーションを与えている。USOPMは、全米で初めて完全にアクセシブルな博物館として設計され、車椅子などでも移動・体験が可能である。3階建て（延べ床面積約5,600㎡）の館内は段差をなくし、緩やかなスロープで各階をつなぎ、最上階から順に展示を見ながら降りる構成となっている。これにより、視覚的・体験的に一体感のある導線が実現されている。

### （3）対応者

Marisa Wigglesworth（USOPM, Chief Executive Officer）

Lindsay Flanagan Huban（USOPM, Chief Content & Integration Officer）

### （4）視察者

栗原 祐司（国立科学博物館 理事（兼）副館長）

亀井 哲也（中京大学スポーツミュージアム 副館長／教授）

三澤 亮太（秩父宮記念スポーツ博物館 主幹）

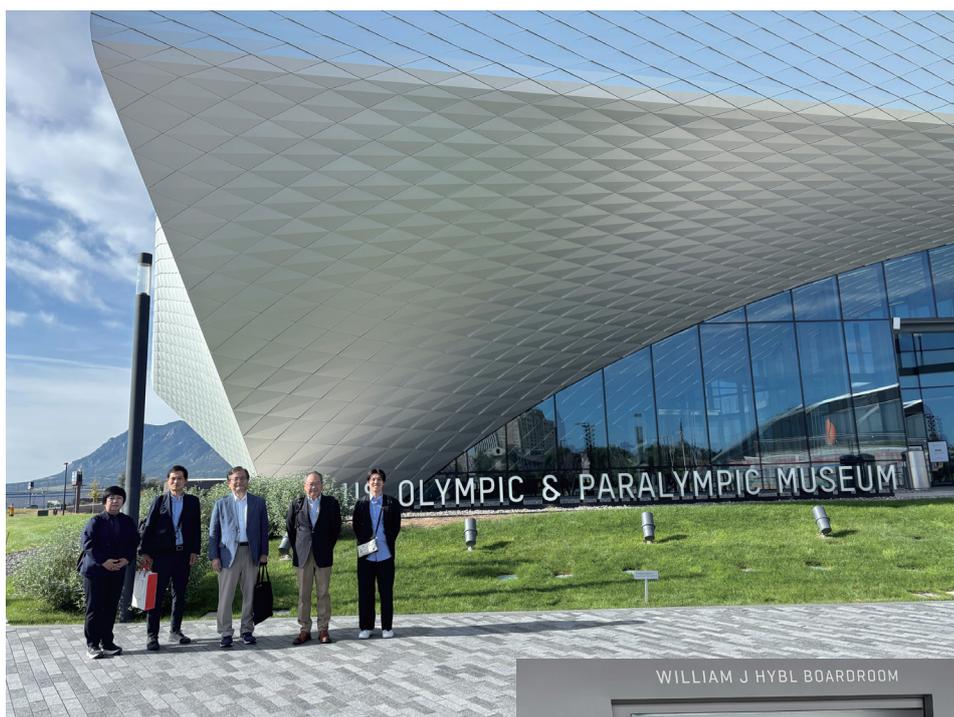
大参 翔平（秩父宮記念スポーツ博物館 学芸員）

黒川 仁美（秩父宮記念スポーツ博物館 コーディネーター）

### （5）調査結果

#### ① ヒトに関すること（人材・組織・連携）

- ・オリンピックミュージアムネットワーク（OMN）<sup>\*1</sup>、国際スポーツ殿堂（ISHF）、コロラドワイオミング博物館協会（CWAM）に加盟している。



United States Olympic & Paralympic Museum 全景



集合写真

- 米国オリンピック・パラリンピック委員会（USOPC）とは、名称の使用および展示内容に関して強固な協力関係を構築している。
- 民間企業との連携は、USOPCの主要スポンサーを中心に進めるとともに、地元の医療機関などともパートナーシップを形成している。
- 学校及び地域との連携については、原則地元の学校及びコロラド州在住者の入館料割引制度等を導入している。
- USOPMが主導する教育プログラムの一つである「Becoming Your Personal Best (BYPB)」を実施している。これは、オリンピック・パラリンピアンの実体験を活用し、学校や家庭で子どもたちのレジリエンシーや自己成長を支援する社会情緒学習カリキュラムである。
- 研究者との連携については現状未着手ではあるが、教育プログラム（BYPB）が青少年にどのような影響を与えるかについて効果検証を行う意向がある。
- アスリートとの連携については複数名がスタッフとして関わっているほか、USOPM内で関連する展示物について直接説明してもらう場を設けている。

## ② モノに関すること（資料・収蔵・展示）

- 資料入手先・方法について、USOPM が所有する多くの現物資産（本、写真、印刷物を含む）が USOPC から好意的に貸与されている。
- 寄贈・寄託の仕組みについては、収蔵庫の容量制約から、原則として展示品以外の現物資産は所有していない。
- 体験展示については、少なくとも年に2～3回はセッションを更新している。

## ③ お金に関すること（財源・資金調達）

- 国や州からの補助金・助成金はなく、USOPM の主な収入源は入館料、グッズ販売、個人および企業からの寄付金である。

## ④ 情報に関すること（知識・データ・発信）

- 情報（知識、データ）については、原則 The Olympic Museum（ローザンヌ）のオリンピックメディアライブラリーにアクセスすることで大半が可能になる。
- メディアとの関係については、コロラドスプリングス観光協会とも協力し、コロラドスプリングス市への観光客に対し USOPM への訪問誘導を目的としたプロモーションを実施している。
- 国際オリンピック史学会（ISOH）とのパートナーシップにより、四半期ごとにトークイベントを開催し、来館できないオリンピック・パラリンピックファンにも参加機会を提供している。

※1：オリンピックミュージアムネットワーク（OMN）は、2006年にIOCの提唱により設立された国際的な協力組織である。世界各地のオリンピック関連ミュージアムやスポーツ博物館が加盟し、現在約37館が参加している。目的はオリビズムの価値を広めることであり、展示や教育プログラム、イベント、収蔵品の管理、広報、商業開発などの分野で連携を行っている。加盟条件として、一般公開されていること、展示の25%以上がオリンピック関連であること、国際博物館会議（ICOM）の倫理基準を遵守することが求められる。ネットワークは、コレクションの交換や共同展覧会、出版物の制作などを通じてコスト削減と運営効率化を図り、オリンピックの歴史と理念を世界に発信する役割を担っている。

## （6）その他アメリカ（コロラド）の主なスポーツミュージアム等の視察状況

### ① World Figure Skating Museum and Hall of Fame 世界フィギュアスケート博物館と殿堂

この殿堂は、フィギュアスケート界において顕著な功績を残した人物を称える国際的な栄誉の場として1976年に設立された。1979年からは、アメリカフィギュアスケート協会の事務所も同じ建物内に併設されている。殿堂入りの対象は、フィギュアスケートの発展に大きく貢献した選手、コーチ、振付師、技術革新者などで



世界フィギュアスケート博物館

あり、厳格な選考基準に基づいて認定される。特に選手の場合、アマチュア競技から引退後5年以上経過していることが条件とされている。博物館内では、殿堂入りした人物の業績を紹介する展示に加え、フィギュアスケートの歴史を古代から現代まで網羅する資料や映像、衣装、トロフィー、スケート靴などを公開している。また、アート作品やアンディ・ウォーホルによる関連作品も展示されている。訪問者はガイド付きツアーを通じて、競技の進化やスポーツの文化的背景を深く学ぶことができる。日本人では、以下の3名が殿堂入りしている。

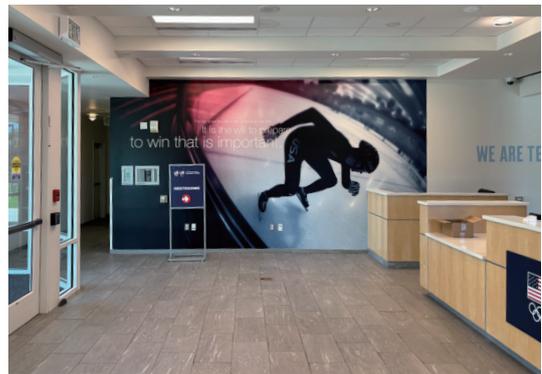
伊藤みどり氏（2004年）：アルベールビル冬季大会（1992）、日本人初の殿堂入り

佐藤信夫氏（2010年）：コーチとしての功績

荒川静香氏（2018年）：トリノ冬季大会（2006）

## ② USOPTC/U.S. Olympic & Paralympic Training Center アメリカオリンピック・パラリンピックトレーニングセンター

USOPTCは、米国オリンピック・パラリンピック委員会（USOPC）が運営する世界トップレベルのアスリート育成拠点である。主施設はコロラド州コロラドスプリングスに位置し、標高を活かしたトレーニング環境を提供している。このセンターは旧エント空軍基地跡地に1978年に設立され、以来「Team USA」の中核として機能してきた。敷地内には、オリンピックサイズのプール、屋内射撃場、バドミントンコート、複数の体育館、ウエイトトレーニングルーム、スポーツ科学研究所、スポーツ医療施設、選手用の寮や食堂が整備されている。選手はスポーツ医学、栄養、心理学の専門サポートを受けながら長期合宿を行い、競技力を高めている。施設は一般公開されており、ビジターセンターやガイド付きツアーを通じて、トレーニング風景やオリンピックの歴史を見学できる。運営資金は連邦政府の支援に頼らず、寄付金や事業収益によって賄われている点が特徴である。米国内には、この施設のほか、冬季競技に特化したニューヨーク州レイクプラシッド、トライアスロンやビーチバレーなどの練習に適したカリフォルニア州チュラビスタにも関連施設があり、いずれもオリンピックやパラリンピックを目指す選手の重要な拠点となっている。



アメリカオリンピック・パラリンピック  
トレーニングセンター

## ③ Colorado Sports Hall of Fame コロラドスポーツ殿堂／Empower Field at Mile High エンパワーフィールドアットマイルハイ

この殿堂は、1964年に米国最高裁判事バイロン・ホワイトによって創設され、翌1965年に初の殿堂入りが行われた。2001年8月には、NFL デンバー・ブロンコスの本拠地スタジ

アム「インベスコ・フィールド・アット・マイルハイ」(現在のエンパワー・フィールド・アット・マイルハイ)内に、コロラド州関係者の殿堂展示と、州のスポーツ界に貢献した選手・指導者・関係者を顕彰する施設が設置された。この施設では、殿堂の紹介に加え、コロラド州のスポーツ史や地元アスリートの功績を紹介する展示を行っており、さらに青少年の育成支援活動も併せて実施している。

#### ④ National Ballpark Museum

ナショナル・ボールパーク・ミュージアム

この博物館は、デンバー出身の野球愛好家である創設者ブルース・ヘラースタイン氏の野球場への情熱を原点として、2012年に開館した。展示室は19世紀建築の元店舗を改装した約2,000平方フィート(約185㎡)の空間で、国内14のクラシック・ボールパーク(1909～1923年建設)に関する貴重な品々をはじめ、フェンウェイ・パークの「グリーンモンスター」の一部(96個のボール痕あり)、シーブ・パーク(1909年)のターンスタイル、球場の座席、レンガ、看板、チケット、プログラム、照明器具、売店用品、制服、さらに地元マイナーリーグチーム「デンバー・ベアーズ」に関する資料など、多彩なアイテムが並んでいる。多くの展示物は「座れる・触れる・体験できる」形式で公開され、来館者は実際に野球場の雰囲気を感じることができる。



コロラドスポーツ殿堂



ナショナル・ボールパーク・ミュージアム

## 2. アメリカ（ニューヨーク）

### （1）調査日

令和7（2025）年10月16日

### （2）ヒアリング対象先／場所

National Baseball Hall of Fame and Museum

#### <基礎情報>

National Baseball Hall of Fame and Museumは、ニューヨーク州クーパーズタウンに所在し、1939年に開館した。殿堂入りは1936年に始まり、初回にはベーブ・ルースやタイ・カッブなどの名選手が選出されている。設立の背景には、野球発祥地とされたクーパーズタウンの伝説と、地元経済振興の目的がある。博物館は3階建てで、銘板ギャラリーを中心に、歴史的ユニフォームやバット、映像資料などを展示している。併設の図書館には、300万点以上の文書、25万枚の写真、1万時間を超える映像が収蔵され、研究拠点としても機能している。年間約30万人が訪れ、教育プログラムや巡回展示を通じて、野球文化の普及に重要な役割を果たしている。



打ち合わせ風景



集合写真

### (3) 対応者

Josh Rawitch	(National Baseball Hall of Fame and Museum, President)
Lisa Bendino Anderson	(National Baseball Hall of Fame and Museum, Vice President, Museum Affairs)
Jon Shestakofsky	(National Baseball Hall of Fame and Museum, Vice President Communications & Content)
Ryan Selzner	(National Baseball Hall of Fame and Museum, Vice President, People and Culture)
Tom Shieber	(National Baseball Hall of Fame and Museum, Senior Curator)
RJ Lara	(National Baseball Hall of Fame and Museum, Director of Collections and Archives)

### (4) 視察者

関口 貴広	(野球殿堂博物館 事業部次長)
永沼 里菜子	(野球殿堂博物館 事業部司書)
江川 哲二	(わかやまスポーツ伝承館 館長)
三澤 亮太	(秩父宮記念スポーツ博物館 主幹)

### (5) 調査結果

#### ① ヒトに関すること (人材・組織・連携)

- 博物館は独立した団体であるが、MLB (メジャーリーグベースボール) や球団と密接に連携しており、理事会には MLB のリーダーや球団コミッショナー、オーナーが参加し、歴史保存などの活動を共に行っている。
- 他国との連携は、台湾、南米、ドミニカ、メキシコ、カナダなどとカジュアルな関係を築いており、その中でも日本とは最も近い関係にある。
- 殿堂同士のネットワークがあり、フットボール、テニス、ロックンロールなど約5つの殿堂ミュージアムと3~5か月ごとに交流し、スタッフ交換を行うこともある。
- スポーツ・ヘリテージ・アソシエーション<sup>\*2</sup>に加盟し、カナダとアメリカを中心に国際的なカンファレンスを開催している。
- 企業と連携し、教育プログラムを企画することがある。例えば、州外から訪れる学生を対象に、地域の銀行がスポンサーとなり、500~600人を招待する事例がある。
- 個人の寄附によって教育プログラムが実施されることもある。
- アスリートによる SNS 発信は非常に効果的であり、協力を得てミュージアムの認知度を高めている。

## ② モノに関すること（資料・収蔵・展示）

- 資料の受け入れは収集委員会で審議し、どう集めるか、何を集めるかはケースバイケースで対応している。
- 資料の貸し借りは国内外で行っており、料金を取らないケースが多く、収益は発生していない。
- スポーツ関連資料の認定・登録は、アメリカアライアンスミュージアム協会の基準に基づき、本物であることを証明する仕組みがある。
- MLB のオーセンティフィケーションシステムでは、試合で使用された用具にシリアルナンバー付きのシールを貼付し、専用サイトで証明書を確認できる。博物館では写真や映像を用いて真贋を確認している。
- アクセシビリティは ADA 法に準拠し、車椅子対応や視点の高さなどを確保している。さらに、法規制以上の対応を実施している。

## ③ お金に関すること（財源・資金調達）

- 連邦政府からの恒常的な補助金はなく、特別プロジェクト時に限り支援を受けている。州からは観光促進のための助成金を定期的に受けている。
- 特別プロジェクトでは、関心のあるスポンサーを募り、プロジェクトとマッチングして実施する。
- 主な収入源は小売り、入館料、スポンサー、ライセンス料である。
- メンバーシップ制度があり、約 22,000 人の会員が 80 ドルから 2,000 ドルまでの会費を支払っている。

## ④ 情報に関すること（知識・データ・発信）

- 所蔵資料のデジタル化を進めており、将来的には一般公開を目指しているが、現状公開できるのは約 10%にとどまる。
- 他館の資料も閲覧できる総合データベースが存在するが、情報の充実には時間を要する。
- デジタル化は年代やテーマごとにまとめて進めている。
- 野球の歴史の重要性を伝えるため、ニュースやメディアとの連携を図っている。スポーツライターとは殿堂入り投票を通じて密接な関係がある。
- マーケティング予算は限られているが、SNS を活用し、クーパースタウンの特別性を発信している。SNS のアクセス数は増加傾向にある。
- 体験型展示でオリジナルカードを作成する際、メールアドレスを登録してもらい、情報収集に活用している。

※ 2：スポーツ・ヘリテージ・アソシエーション（International Sports Heritage Association、ISHA）は、1971 年に北米のスポーツ博物館や殿堂関係者によって設立された非営利の国際組織である。1989 年に法人化され、2005 年に現名称に改称された。会員は北米を中心に、南米、欧州、アジアなど世界各地に広がり、130 以上のスポーツ博物館やホール・オブ・フェーム、関連企業や個人が含まれる。ミッ

ションはスポーツ遺産の保存と普及であり、教育、啓発、支援を柱として、会員間で運営、収集、展示、広報、マーケティングなどの知識や資源を共有するネットワークを提供している。主な活動として、毎年開催される年次会議では、展示や保存技術、資金調達、マーケティングなど多様なテーマでセミナーや施設見学、商談展示会を行う。また、ニュースレターやホワイトペーパーの発行、助成金制度の提供などを通じて、業界の専門性向上と持続可能な発展に寄与している。ISHA はスポーツ文化の価値を次世代に継承するため、国際的な協力と知識共有を推進する重要な役割を担っている。

## (6) その他アメリカ（ニューヨーク）の主なスポーツミュージアム等の視察状況

### ① マディソンスクエアガーデン

ニューヨーク・マンハッタンにあるこの施設は、「世界で最も有名なアリーナ」として知られる複合施設である。初代は1879年に開業し、現施設は4代目として1968年2月11日に完成した。座席数は、コンサートで約22,000席、バスケットボールで約19,800席、アイスホッケーで約18,000席と大規模である。NBAのニューヨーク・ニックスやNHLのニューヨーク・レンジャースの本拠地であり、ボクシング、総合格闘技、プロレス、アイスショーなど幅広いイベントが開催されている。さらに、歴史的なスポーツイベントや政治集会、コンサートも多数行われ、「世界で最も有名なアリーナ」という評価を確立している。



マディソンスクエアガーデン入口 集合写真

### ② ジャッキー・ロビンソン・ミュージアム

ジャッキー・ロビンソン・ミュージアムは、2022年9月5日にニューヨーク・マンハッタンの75 Varick Streetで開館した。14年にわたる企画・準備期間を経て完成し、設計はGensler、運営はジャッキー・ロビンソン財団が担っている。館内は約20,000平方フィートの広さを誇り、4,000点以上の遺品を収蔵。ロビンソンの野球選手としての功績と人権活動を、インタラクティブな展示で紹介している。

展示には、ホール・オブ・フェームの記念盾、契約書、コミック、3Dモデルなどが含まれ、Ebbets Fieldの再現模型も設置されている。博物館はスポーツ史にとどまらず、公民権運動におけるロビンソンの貢献を強調し、教育プログ



上：説明風景 下：打ち合わせ風景

ラムや講演、フォーラムを通じて、平等・経済的機会・社会正義といったテーマに取り組んでいる。

### ③ シティフィールド

シティ・フィールドは、アメリカ・ニューヨーク市クイーンズ区にある MLB ニューヨーク・メッツの本拠地球場である。2006年11月に着工し、2009年3月29日に大学野球の試合で開場、4月13日にレギュラーシーズン初戦を迎えた。収容人数は固定席で41,922人（2009～2011年は約41,800人）、立見席を含めると45,000人以上を収容可能である。メッツの試合に加え、MLS ニューヨーク・シティ FC の一部試合でも使用される。



シティフィールド外観

場内には、ジャッキー・ロビンソンをテーマにした大広間「ジャッキー・ロビンソン・ロトンダ」や、ホームラン後に登場する名物“ホームランアップル”などの特徴的な演出がある。さらに、2013年の MLB オールスターゲーム（観客45,186人）や2015年の NBA チャンピオンシリーズなど、国内外の大規模イベントの会場としても活用されている。

### 3. スイス（ローザンヌ）

#### （1）調査日

令和7（2025）年11月26日（水）

#### （2）ヒアリング対象先／場所

The Olympic Museum（オリンピック・ミュージアム）

#### <基礎情報>

オリンピック・ミュージアム（The Olympic Museum）は、スイス・ローザンヌにある国際オリンピック委員会（IOC）公式の文化施設で、オリンピックの歴史・理念・価値を世界に発信する拠点である。1993年に開館し、2013年の大規模リニューアルを経て、現在では世界で最も革新的なスポーツ博物館の一つとして知られている。レマン湖畔の美しいロケーションに位置し、庭園や彫刻公園、湖を望むカフェを併設している。館内には約3,000㎡の展示スペースがあり、古代ギリシャの競技具、1896年アテネ大会から現代までのメダル、聖火トーチ、競技用具、ユニフォームなどを展示している。さらに、オリンピックの文化的側面を示す芸術作品も収蔵している。

2025年9月から始まった企画展では「スポーツの進化」をテーマに、テクノロジーや文化の変化を紹介している。オリンピックの革新を4つの時代に分けて解説し、eスポーツやバーチャルスポーツの体験、放送技術、タイム計測、審判技術の進化も展示している。特に審判の展示では、1964年東京大会の写真が大きく取り上げられている。

#### （3）対応者

Frédérique Jamolli（IOC Culture and Heritage Department/Head of International Cultural Affairs）

Meghan Drascic-Gaudio（IOC Olympic Museum Development Manager）

#### （4）視察者

阿部 雅司（札幌オリンピックミュージアム 館長）

山谷 和正（札幌オリンピックミュージアム 学芸員）

三澤 亮太（秩父宮記念スポーツ博物館 主幹）

村上 佳奈子（秩父宮記念スポーツ博物館 主任／学芸員）

黒川 仁美（秩父宮記念スポーツ博物館 コーディネーター）

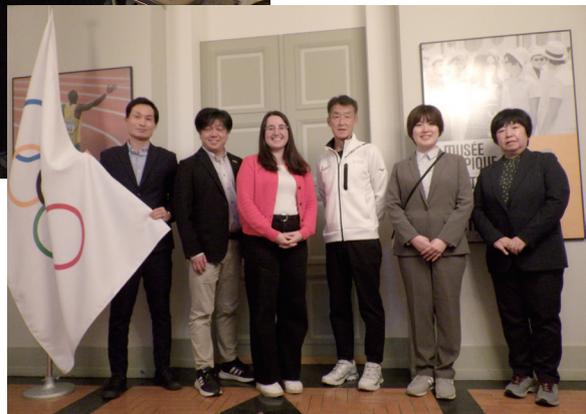
#### （5）調査結果

##### ① ヒトに関すること（人材・組織・連携）

- ・博物館はIOCの一部門として位置づけられ、IOC本部の各部署と連携している。また、ロー



打ち合わせ風景



集合写真

ザンヌ市内には多くの国際競技連盟の事務所があり、各団体との関係性が強い。

- オリンピック・ムーブメント推進には、IOCのパートナーやスポンサーとの協力が不可欠である。
- 世界各国に大学ネットワークがあり、オリンピックスタディーセンターを拠点としてオリンピック関連の研究が行われている。
- 地元の大学（ローザンヌ大学、スイス連邦工科大学ローザンヌ校、チューリッヒ校）とは、オリンピック研究に加え、アスリートの栄養管理や競技用具に関する研究も連携して実施している。
- ミラノ・コルティナ冬季大会に向け、文化プログラムの一環として「オリンピックアーティストプログラム」を実施し、元オリンピック選手によるスポーツと芸術を融合した特別企画を展開している。
- 新たにオリンピック競技大会を開催する大会組織委員会の関係者に向けた、文化的、教育的側面からの指導も担っている。

## ② モノに関すること（資料・収蔵・展示）

- 収集方針や寄贈・寄託の仕組みは非常に多岐にわたり、詳細な説明にはポイントを絞る必要がある。
- 他館への貸し出しは国際基準に則って実施している。

- 2024年パリ大会では、300点のアイテムを世界各国に貸し出した実績がある。
- ミラノ・コルティナ冬季大会関連の文化プログラムとして、ミラノ市内のルイジ・ロヴァーティ美術館で「オリンピックー三千年の物語」特別展を開催。オリンピック・ミュージアム、ローザンヌ州立考古学・歴史博物館、ロヴァーティ美術館の3者共催で実施している。
- バリアフリー対応は既に整備済みだが、さらなるアクセシビリティ向上のため、AIを活用した音声ガイドの導入を検討している。
- 体験型展示は概ね年1回更新している。
- インタラクティブ展示は、来館者が頭と身体をバランスよく使えるよう構成されている。

### ③ お金に関すること（財源・資金調達）

- 博物館の運営費はすべてIOCの予算から支出されている。
- 寄付金については、博物館側から積極的なアプローチは行っていない。

### ④ 情報に関すること（知識・データ・発信）

- 広報活動は、館内の専門チームがSNSや従来メディアを通じて展開している。
- オリンピック・ムーブメント推進に重要と判断された場合、IOCのプラットフォームで発信し、より広い注目を集める。
- 博物館単独での広報には限界があるため、あらゆるリソースを活用し、共同でコミュニケーションを展開することが重要と考えている。
- オープンソースでいつでもアクセス可能な資料も一部公開されている。

## （6）その他スイスの主なスポーツミュージアム等の視察状況

### ① FIFA Museum

FIFAミュージアム（FIFA Museum）は、スイス・チューリッヒにある国際サッカー連盟（FIFA）公式のミュージアムで、サッカーの歴史と文化を世界に発信することを目的として2016年2月28日に開館した。館内は3フロアにわたり、FIFAワールドカップのトロフィー、歴代大会の公式ボール、ユニフォーム、メダルなど、サッカーの歴史を象徴する貴重な品々が展示されている。特徴的なのは、来館者が楽しみながら学べるインタラクティブな体験型展示である。



FIFA ミュージアム外観

巨大ピンボールやVR体験、タッチパネルを使ったゲームなど、多彩な仕掛けが用意されているほか、180度スクリーンによる迫力ある映像体験も楽しめる。また、女子サッカーやバロンドールに関する特別セクションも設けられており、幅広い視点からサッカーの魅力を伝えている。

## 4. イタリア（ミラノ）

### （1）調査日

令和7（2025）年11月28日（金）

### （2）ヒアリング対象先／場所

San Siro Stadium Museum

#### <基礎情報>

サンシーロ・ミュージアム（San Siro Museum）は、イタリア・ミラノのサンシーロ・スタジアム（正式名称：Stadio Giuseppe Meazza）内にあるサッカー博物館で、ACミランとインテルという二大クラブの歴史を紹介する施設である。スタジアムは1926年に建設され、約76,000人を収容するイタリア最大級の規模を誇り、国の指定記念物に登録されている。ワールドカップやチャンピオンズリーグ決勝など、数々の歴史的試合が行われてきた「サッカーの聖地」であり、試合がない日でもその雰囲気味わえるのが、このミュージアムとスタジアムツアーの魅力である。

博物館は1996年に開設され、展示内容は両クラブの優勝トロフィー、歴代選手のユニフォーム、サイン入りボール、写真、記念品など多彩なアイテムが並ぶ。特にスタジアムツアー



打ち合わせ風景



集合写真

では、ミランとインテルのロッカールームを見学できるほか、選手が実際に通るトンネルを抜けてピッチに立つ体験も可能である。さらに、MIXゾーンやVIPルームなど、普段はテレビでしか見られない場所を間近で見られるのも魅力である。ガイドツアーでは、ACミランとインテルのチーム理念の違いなど、現場ならではの貴重な話を聞くことができる。

### (3) 対応者

Simona Trovati (San Siro Museum & Tour Manager)

### (4) 視察者

阿部 雅司 (札幌オリンピックミュージアム 館長)

山谷 和正 (札幌オリンピックミュージアム 学芸員)

三澤 亮太 (秩父宮記念スポーツ博物館 主幹)

村上 佳奈子 (秩父宮記念スポーツ博物館 主任/学芸員)

黒川 仁美 (秩父宮記念スポーツ博物館 コーディネーター)

### (5) 調査結果

#### ① ヒトに関すること (人材・組織・連携)

- 毎年文化展示を企画しており、ミラノ市主催のイベント「Museo City」では、ハイレベルな文化プロジェクトの推進と発展を目的としている。
- 来館者の多くは外国人であるが、イタリア国内でミュージアム文化を普及させるため、上記事業（「Museo City」）に協力している。
- 国際連携の代表例として、FIFA ミュージアムとの協力が挙げられる。
- チャンピオンズリーグ開催期間中は、FIFA や UEFA と連携し、ミュージアム&ツアー (M&T) の開館時間などを柔軟に調整している。
- 地域の学校 (6歳～14歳) を対象に、スポーツの価値やサッカーの歴史、ホームクラブについて学ぶ教育プログラム「Progetto Scuole (スクールプロジェクト)」を推進している。
- ミラノ市内の高等教育機関 (LIMEC) と連携し、成績優秀な学生に対して150時間のインターンシップを実施している。

#### ② モノに関すること (資料・収蔵・展示)

- 複数のコレクターが所有する記念品を展示しており、展示ケースに収まらない資産は安全な保管庫で管理している。
- スタジアムと両クラブ (インテル、ACミラン) の歴史を、過去から現在までの記念品コレクションを通じて紹介している。
- 主な展示物は、選手のユニフォーム、シューズ、サッカーボール、往年のスター選手の写真、さらにマラドーナ、メッシ、ルーニー、ネイマールなど世界的名選手のユニフォーム

も含まれる。

- インクルーシブな取り組みとして、重度障がい者や車いす利用者、その介助者には特別ツアーを提供し、無料で入場できるようにしている。

### ③ お金に関すること（財源・資金調達）

- M&T は民間施設であり、国や地方自治体からの補助金や助成金は一切受けていない。
- 将来的には、文化・芸術展示などの特別イベントやプロモーションのためにスポンサー獲得を目指している。

### ④ 情報に関すること（知識・データ・発信）

- 選手、イベント、試合、オリンピックなど特定テーマに関して、国際的なテレビ局や国内外のジャーナリストから撮影や記事執筆の依頼が多数寄せられている。
- サンシーロ・スタジアムは、2月に開催されるミラノ・コルティナ冬季大会の開会式会場となる予定であり、世界的な注目を集める機会となっている。

## （6）その他イタリア（ミラノ）の主なスポーツミュージアム等の視察状況

### ① Fondazione Luigi Rovati – Museo d'Arte ルイジ・ロヴァーティ財団美術館

ミラノ中心部コルソ・ヴェネツィアにある美術館は、古代エトルリア美術と現代アートの融合をテーマに、19世紀の歴史的建築を改装して設立された。現在開催中の特別展「I Giochi Olimpici - Una storia lunga tremila anni（オリンピックの3000年史）」は、ミラノ・コルティナ2026冬季大会の文化オリンピックの一環として、2025年11月26日から2026年3月22日まで開催されている。展示は5つのテーマで構成され、古代ギリシャやエトルリアの競技文化から、近代オリンピックの理念、現代の平和・包摂・ジェンダー平等までを紹介している。



ルイジ・ロヴァーティ財団美術館

見どころは、紀元前530～520年頃の「オリンピックの墓」壁画（タルクィニア国立博物館所蔵）の初公開や、古代競技具と現代アスリート用具の対比展示。さらに、ウサイン・ボルトの北京2008ユニフォーム、マイケル・ジョンソンのスパイク、マイケル・ジョーダンのバスケットシューズ、アルベルト・トンバの長野1998スキーウェアなどスター選手のアイテムも展示されている。この特別展は、IOC直轄のオリンピック博物館（ローザンヌ）と共催し、スイスのMusée cantonal d'archéologie et d'histoire、Fondazione Luigi Rovatiとの国際共同企画である。

## 5. オーストラリア（メルボルン）

### （1）調査日時

令和7（2025）年9月15日（月）

### （2）ヒアリング対象先／場所

Australian Sports Museum

#### <基礎情報>

オーストラリア・メルボルンのメルボルンクリケットグラウンド内にある、オーストラリアのスポーツを専門とする博物館である。運営はメルボルンクリケットクラブ（MCC）が設立した会社によって行われ、博物館の職員はすべてこの会社の従業員として位置づけられている。展示内容は、1956年メルボルンオリンピックをはじめとするオリンピック関連の展示、クリケット、オーストラリア固有のスポーツに関する展示、さらに体験型ゾーンなど、多彩な構成となっている。

### （3）対応者

Jed Smith（Executive Manager）

稲垣 真理子（Collections Access Coordinator）

### （4）視察者

下湯 直樹（日本オリンピックミュージアム マネージャー）

大西 啓介（秩父宮記念スポーツ博物館 理事／館長）

末木 克昌（秩父宮記念スポーツ博物館 推進役／副館長）

新名 佐知子（秩父宮記念スポーツ博物館 主幹／学芸員）

山田 かおり（秩父宮記念スポーツ博物館 職員）

### （5）調査結果

#### ① ヒトに関すること（人材・組織・連携）

- ASM（Australian Sports Museum）の使命は、スポーツを通じて「オーストラリアという国のストーリー」を伝えることであり、社会博物館的な要素を持つ。
- スポーツは多民族国家オーストラリアで、人々をつなぐ重要な役割を果たしている（特にクリケット）。
- 資料収集専門スタッフが1名おり、2年間かけてコレクションレビューを実施している。
- ボランティアは約350名で、主にスタジアムツアーを担当している。
- 各部門トップによる週次ミーティング、スタッフ全体ミーティングも週1回実施している。



打ち合わせ風景



集合写真

- ASM ネットワークを2018年に設立し、孤立する博物館担当者をつなぐ場を提供している。年1回カンファレンスを開催している。
- OMN 加盟により、国際的な学び合いの場を確保している。
- 障がい者スポーツ資料も積極的に収集し、多様性を重視している。
- イベントでは学校を主要ターゲットに教育プログラムやツアーを実施している。
- 自閉症などへの配慮として、刺激を抑えたツアーを提供している。

## ② モノに関すること（資料・収蔵・展示）

- ASM は、オーストラリア全体を語るスポーツ資料を収集対象とし、草の根レベルの資料も含まれている。
- コレクションポリシーは明確で、寄贈は厳しく選別（受け入れ率約5%）している。
- 保存スペースの制約から、大型や状態の悪い資料は受け入れない。
- パラリンピックや障がい者スポーツ資料も収集対象としている。
- 展示はハンズオンやデジタル技術を活用し、常設展示の魅力向上を重視している。
- コレクションツアーや収蔵庫ツアーを実施している。

### ③ お金に関すること（財源・資金調達）

- 基本的な運営費は MCC の会員費（15 万人×年間 800 ドル）で賄われる。その他、イベント収入やスポンサー収入が財源となっている。
- 政府からの支援は限定的（オープン時の特別費用のみ）である。
- 予算計画は前年の集客数やトレンドを基準に策定し、マーケティングチームや MCG ツアーチームと協議している。
- 大型イベント（例：ラグビーワールドカップ）への投資は慎重に検討している。
- 予算承認には複数理事会の合意が必要で、プロセスは複雑である。

### ④ 情報に関すること（知識・データ・発信）

- 学校向け広報を重視し、データベースからメールで直接アプローチしている。
- ASM ネットワークは無料で参加可能、年 1 回カンファレンスを開催し、情報共有を促進している。
- 広報活動は学校を中心に、SNS やメールを活用している。
- 障がい者向けイベント情報も発信（刺激を抑えたツアーなど）している。
- コレクション評価やポリシーに関する情報は明確化し、寄贈希望者への対応も厳格である。

## （6）その他オーストラリア（メルボルン）の主なスポーツミュージアム等の視察状況

### ① 王立展示館

王立展示館は、1880 年メルボルン万国博覧会の中心的な展示館として建設された。設計は、ビクトリア州立図書館やメルボルン市庁舎を手掛けた建築家ジョセフ・リードによるものである。建物は全長 150m、高さ 68m、建築面積 12,000㎡を誇り、中央のドームはフィレンツェ大聖堂をモデルに、八角形の台座の上に構築された。当初は周囲に小規模な別館が建ち並んでいたが、現在は現存していない。



王立展示館

博覧会終了後も、王立展示館はメルボルンの歴史的イベントの会場として利用され続けた。主な事例として、1888 年のオーストラリア入植 100 年記念展示会、1901 年の第一回オーストラリア連邦議会開会式、1919 年のスペインかぜ流行時の臨時病院、1956 年メルボルンオリンピックでのレスリング会場などが挙げられる。2004 年 7 月 2 日、王立展示館はカールトン庭園とともにユネスコ世界遺産（文化遺産）に登録された。

### ② メルボルン博物館

メルボルン博物館は、2000 年に開館したビクトリア州立の総合博物館であり、南半球最

大級とされている。王立展示館の隣に位置し、館内は展示場のほか、バンジラカ・アボリジニ文化センターやIMAXシアターなどで構成されている。また、ディスカバリーセンターでは、州内の花や動植物、化石、歴史、そして先住民アボリジニの文化について学ぶことができる。なお、メルボルン博物館と王立展示館は、ビクトリア州の博物館運営機構である「Museums Victoria」によって管理されている。



メルボルン博物館

### ③ オーストラリア国立サーフィン博物館

ビクトリア州トーキーにあるこの博物館は、世界最大のサーフィンとビーチ文化をテーマにした施設である。1993年に開館し、トーキー周辺にはベルズ・ビーチをはじめ、国際大会が開催される有名なサーフィンスポットが数多く存在する。国際サーフィン連盟も、この地域を「世界のサーフィン遺産の最も重要な中心地」の一つと位置付けている。運営は、トーキーを含む近隣自治体による評議会「Surf Coast Shire Council」が担っている。



オーストラリア国立サーフィン博物館

## 6. 韓国（ソウル）

### （1）調査日

令和7（2025）年10月30日（木）

### （2）ヒアリング対象先／場所

NATIONAL SPORTS MUSEUM OF KOREA（大韓民国 国立スポーツ博物館）

#### <基礎情報>

韓国では現在、スポーツ文化を象徴する新たな拠点として、国立スポーツ博物館（National Sports Museum of Korea）がソウル市松坡区のオリンピック公園内に建設されている。この施設は、かつて同じ場所にあった「ソウルオリンピック記念館」の後継である。記念館は1988年ソウルオリンピックの理念を継承するために1990年に開設され、地下1階・地上2階の構造で、オリンピックの歴史や選手の寄贈品を「平和」「ハーモニー」「繁栄」「栄光」というテーマで展示していた。しかし、老朽化と展示刷新の必要性から2018年6月に長期休館となり、全面改修を経て、より広範な韓国スポーツ史を扱う国立スポーツ博物館へと生まれ変わる。

新しい博物館は韓国初の国家レベルのスポーツ専門施設であり、1986年アジア大会、1988年ソウルオリンピック、2002年FIFAワールドカップ、2018年平昌冬季オリンピックなど、韓国が世界に誇るスポーツイベントの歴史を体系的に保存・展示することを目的としている。開館は2026年9月頃を予定しており、最新のデジタル技術を活用した体験型展示や教育プログラムを導入し、スポーツの価値を広く伝える場となる計画である。著名アスリートの寄贈品やオリンピック関連資料も展示され、スポーツを通じた文化交流と学びの拠点として期待されている。さらに、この博物館は単なる展示空間にとどまらず、スポーツ科学や教育、文化活動を融合させた複合施設として設計されており、韓国のスポーツの過去・現在・未来をつなぐ役割を担う。

### （3）対応者

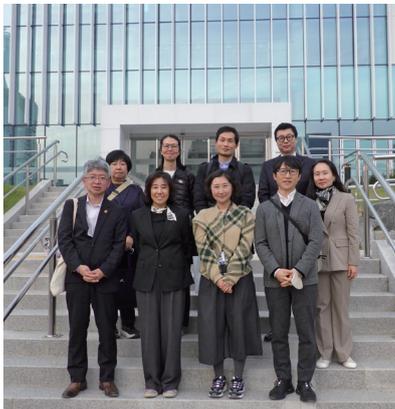
Kim Yo Jin           (Museum Team/Team Manager KSPO)  
Seong Ju-Youn       (Museum Team/Deputy Director KSPO)  
Baek, Sun Hwang   (National Sports Museum/Curator KSPO)  
Park, Hyo Jung       (National Sports Museum/Curator KSPO)

### （4）視察者

大西 啓介（秩父宮記念スポーツ博物館 理事／館長）  
末木 克昌（秩父宮記念スポーツ博物館 推進役／副館長）  
三澤 亮太（秩父宮記念スポーツ博物館 主幹）  
新名 佐知子（秩父宮記念スポーツ博物館 主幹／学芸員）  
黒川 仁美（秩父宮記念スポーツ博物館 コーディネーター）



打ち合わせ風景



集合写真

## (5) 調査結果

### ① ヒトに関すること（人材・組織・連携）

- オリンピックミュージアムネットワーク（OMN）に加盟し、関連するミッションを遂行している。
- 国内スポーツ博物館とは「交流会」を通じてネットワークを構築中である。
- 民間企業とのパートナーシップは、開館後に検討する予定である。
- 所在地であるソウル特別市松坡区内の博物館と協力し、博物館巡りなどのプログラムに参加する計画である。また、開館後には松坡区内の学校とコミュニティを構築することを検討している。
- 展示や研究調査の実施にあたり、体育学会および体育史学会と協力している。

## ② モノに関すること（資料・収蔵・展示）

- 国内の遺物収集管理指針に沿って収集・管理を進めている。この指針には寄贈・寄託・購入の手続きも含まれる。ただし、収集範囲の拡大や分類方法には課題がある。
- 実物資料については寄贈・寄託のシステムが整備されている。
- 遺物と資料は別々に扱われている。遺物は9段階の手続きを経て登録後、収蔵庫に保存している。
- 資料には指針がないため、収蔵庫ではなく別途目録化して管理している。

## ③ お金に関すること（財源・資金調達）

- 国民体育振興基金による全額補助で運営されている。
- 国内の国立博物館は原則として入館料が無料である。
- 民間や個人からのサポート制度は他機関との調整が必要で、現時点では具体的な計画はない。

## ④ 情報に関すること（知識・データ・発信）

- 現状、国民体育振興公団（KSPO）傘下の一部署として位置づけられており、報道資料はすべてKSPO広報室を通じて配布されている。
- SNS（Instagram、YouTube）は独自に運営している。
- 認知度は徐々に向上しているが、開館3か月前から積極的な広報を展開する予定である。
- PR方法として、アスリートが自身の遺産を寄贈し、その様子を発信することで双方にメリットがある仕組みを検討している。
- これまでソウルオリンピック記念館と国立体育博物館の2館で運営していた博物館を統合し、国立スポーツ博物館として再編するにあたり、従前の展示物は遺物と資料に分けて管理している。
- 資料には報告書、DVD、映像資料があり、5年ごとにデジタル化を完了済みである。
- 国立体育博物館の展示物は2016年から収集を開始し、2019年までの遺物はデジタルアーカイブ化済みである。2020年以降の遺物も順次デジタル化を進める予定である。
- 開館後は国家文化遺産ポータル（e-Museum）でデジタル化済み資料を公開する計画である。
- 今後は平昌冬季オリンピック博物館など国内機関との交流会に参加し、情報共有を進める。
- 映像資料は膨大なため、現状は実物資料のみ受け付けている。

## （6）その他韓国（ソウル）の主なスポーツミュージアム等の視察状況

### ① 国立中央博物館

国立中央博物館（National Museum of Korea）は韓国最大級の博物館であり、敷地面積は約93,000坪、延べ床面積は約41,000坪を誇る世界有数の文化施設である。所蔵品は約42

万点に及び、旧石器時代から朝鮮王朝時代、さらに世界の文化に関する資料まで幅広く展示している。現在の建物は、韓国の文化遺産を体系的に保存・展示する国家的プロジェクトの一環として建設され、2005年10月28日に開館した。視察時には、光復80周年記念特別展「両足で世界を制覇する」が開催され、1936年ベルリンオリンピック男子マラソンで金メダルを獲得した孫基禎（1912-2002）選手の足跡が紹介されていた。



国立中央博物館

## ② 大韓民国歴史博物館

ソウル歴史博物館 (Seoul Museum of History) は、ソウル市が運営する市立博物館で、2002年に慶熙宮（キョンヒグン）前に開館した。朝鮮時代から現代までのソウルの都市史をテーマに、都市の発展や人々の生活、文化を多彩な展示で紹介している。特に、都市の近代化と国際化の象徴とされる1988年ソウルオリンピックにも焦点を当て、オリンピックを通じてソウルがどのように変貌したかを示すとともに、都市開発やインフラ整備についても紹介している。



大韓民国歴史博物館

## 第3章 | 国内ネットワークの状況と調査結果

## 1. アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク（愛称：ブンカラ）

### （1）調査日

令和7（2025）年8月28日（木）

### （2）ヒアリング対象先／場所

国立アイヌ民族博物館

#### <基礎情報>

「アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク」（愛称ブンカラ）は、国立アイヌ民族博物館並びに国内外の博物館・美術館・研究機関及びその他博物館等事業に関係のある団体とネットワークを独自に形成し、アイヌの歴史・文化等に関する資料情報の集約と利活用の促進や様々な事業の活性化を図るとともに、アイヌ文化の振興・啓発に寄与することを目的としている。現在全国各地の機関が参加し、研修会や共同研究、協働展示などを開催している独自のネットワークである。

### （3）対応者

内田 祐一（国立アイヌ民族博物館 副館長）

吉野 孝行（国立アイヌ民族博物館 副館長）

森岡 健治（国立アイヌ民族博物館 研究学芸部 研究交流室長）

永野 正宏（文化庁企画調整課（国立アイヌ民族博物館） 国立アイヌ民族博物館運営推進調査官）

田村 将人（文化庁企画調整課（国立アイヌ民族博物館） アイヌ文化振興調査官）

### （4）視察者

末木 克昌（秩父宮記念スポーツ博物館 推進役／副館長）

三澤 亮太（秩父宮記念スポーツ博物館 主幹）

山本 洋（秩父宮記念スポーツ博物館 主任／学芸員）

村上 佳奈子（秩父宮記念スポーツ博物館 主任／学芸員）

### （5）調査結果

#### ① 設立の背景・目的

- ・「民族共生の象徴となる空間」における博物館基本構想の博物館の目的の中に「アイヌの歴史、文化等を展示する博物館等をつなぐネットワーク拠点となる博物館」が掲げられ、基本計画にも盛り込まれたことがネットワークの始まりとなった。
- ・ネットワークの設立に当たり、準備会を10回程度、設立準備会議を2回開催した。ネットワーク設立の際は、北海道博物館協会の催事でPRを行った。



打ち合わせ風景



入口前集合写真

- アイヌの歴史・文化等に関する資料情報の集約、利活用の促進、様々な事業の活性化を図り、アイヌ文化の振興・啓発に寄与することを目的としている。

### ② 会員団体の構成と参加条件について

- 会員数は、令和3年度4月時点において53会員機関（道外8機関）で、令和7年4月時点では74会員（道外は16機関）となっている。
- 民間企業や大学などの研究機関は参加していない。国内外の博物館を対象に、学芸員など専門職員がいなくても加入を認めている。

### ③ 組織体制・運営方法

- 設立当初から昨年度までは2名で実施していたが、体制を変更し、グループ制に編成し直した。国内交流、国際交流、調査研究の3グループに編成し、アイヌ文化のネットワーク

は、国内交流グループで担当している。大学との連携協定の事務もあるため、他のグループのメンバーも協力し、実質4名で担当している。業務量としては、運営委員会を年3回開催するための委嘱手続きや旅費・謝金の支払い、WEBの会報なども作成している。

- 文化庁が国立アイヌ民族博物館を建設する際に、ネットワークを事業の一つとしていたため、ネットワークに係る予算がついている。
- 総会は開催していない。国立アイヌ民族博物館の事業として実施しているため、会員館には費用負担がない。また、会員種別はなく、民間企業や大学などの研究機関を含めてない。北海道博物館協会は賛助会員などがあり、企業を入れて寄付金を募っている。

#### ④ 活動内容

- 運営委員会を年3回開催している。春、11月と年度末に開催している。研修を年1回実施し、会員機関1名分は国立アイヌ民族博物館で旅費を負担している。また、共同研究を実施しており、国立アイヌ民族博物館側で費用負担し、会員機関から募集して採択する形で実施している。
- 情報共有はメールや会員専用のWeb上で実施している。なお、北海道博物館協会学芸職員部会のWEB上で作成した学芸部会の職員コラムは人気があり、蓄積した情報で出版社から本を出したところ、評判が良かった。

#### ⑤ 課題と工夫

- 研修は講義形式的な内容だと受講側のメリットがあまりないことがわかってきたため、対面でワークショップをするなど、担当者同士がつながり、関係性を深めることを目的とした研修にシフトチェンジしている。ワークショップの際は、聞きやすい仕掛けを作り、お互いの顔が見える研修にしている（11月6日・7日実施予定）。

#### ⑥ 成果と評価

- ネットワークとしての成果について、定量的な目標の設定や外部からの評価や支援（補助金、表彰など）はない。

## 2. 人権ネット（人権資料・展示全国ネットワーク）

### （1）調査日

令和7年（2025）年10月7日（火）

### （2）ヒアリング対象先／場所

水平社博物館

#### <基礎情報>

人権ネット（人権資料・展示全国ネットワーク）は、人権確立のための研究、教育、啓発に寄与することを目的に、人権に関する資料を収集保管・調査研究・展示公開を行う博物館、資料館、人権センター、研究所等で結成されたネットワークである。



入口前集合写真



打ち合わせ風景

### (3) 対応者

駒井 忠之 (公益財団法人奈良人権文化財団 水平社博物館 館長)  
佐々木 健太郎 (公益財団法人奈良人権文化財団 水平社博物館 学芸員)

### (4) 視察者

來田 享子 (中京大学副学長／中京大学スポーツミュージアム館長)  
末木 克昌 (秩父宮記念スポーツ博物館 推進役／副館長)  
三澤 亮太 (秩父宮記念スポーツ博物館 主幹)  
荒谷 吉恵 (秩父宮記念スポーツ博物館 主任専門職)

### (5) 調査結果

#### ① 設立経緯・背景

- ・人権問題への関心の高まりを背景に、各地で人権資料館や展示活動が進められたが、資料収集や展示方法の体系化に課題があった。また、どこにどんな資料があるか把握できていなかった。
- ・人権関係資料を扱う展示施設・研究機関等の相互交流と親睦を深め、研究・教育・啓発に寄与するため1996年(平成8年)大阪人権博物館が中心となって、人権に関する資料を収集・展示している全国の団体等によびかけ、「人権資料・展示全国ネットワーク(人権ネット)」を設立した。
- ・ネットワークの目的は、系統的組織的に資料を調査・収集すること、展示事業の実例や資料に関する情報を交換しあえる横断的なネットワークをつくることである。
- ・大阪人権博物館・「(仮称)水平社歴史館」建設推進委員会・福山市人権平和資料館の3者で呼びかけ文を作成し、大阪人権博物館が元々交流を持っていた団体施設に対して呼びかけを行った。

#### ② 加盟団体の構成と参加条件について

- ・設立時は15団体。現在は30団体で、2025年11月には31団体となる予定。加盟団体は徐々に増えているが、閉館などの理由により脱退するケースもある。
- ・博物館、資料館、人権センター、研究所などを対象としている。運営形態は、行政、公益財団法人から個人運営まで様々で民間企業の加盟はない。理念に賛同し、展示できる資料を保有していることが望ましいが、明確な基準は設けていない。

#### ③ 組織体制・運営方法

- ・発足当初から長く同じ団体が事務局を運営していたが、負担軽減と主体的な参加を目的として、現在ブロック単位で3年間の持ち回りとしている。全ての団体が持ち回りで事務局に参加するが、代表を担うことや実働が困難な団体もあるため、事務局はブロックごと複

数館で構成している。

- 事務局会議は年1～3回実施している。ブロック構成はできるだけ集まりやすい距離感を考慮しており対面で行うこともあるが、オンライン会議も活用している。
- 主な事務局業務は、会計・総会準備・総会報告を兼ねたネットワークニュースの作成である（年1回メール配信）。ネットワークニュースは年に複数回発行していたが、事務局団体への負担が大きいことから、現在は総会報告をメインに年1回の作成としている。無理なく長く続けることを最重要視している。
- 各館からの会費（6,000円）の他は、必要に応じた総会当日の集金（会場運営費）のみとし、財源管理は、事務局が行っている。出張費は各館で支出し、総会に係る費用（講演謝金等）は人権ネット予算から支出している。

#### ④ 活動内容

- 年1回の総会を実施している。総会初日は事業計画等の審議と講演、2日目は開催地域のフィールドワークを実施している。全国の人権関係施設を訪問することで、加盟団体の情報アップデートを図っている。総会初日の講演と2日目のフィールドワークが研修のような位置づけとなっている。
- 過去に巡回展などを行った例もあるが、事務局が2～3年で計画実行するのは難しい。加盟団体間で個別にやり取りして連携できることが大切と考えている。水平社博物館でも、人権ネットを活用して、自館にない水俣病やアイヌに関する資料を借り受けて展示を行い、関心を持ってもらう入口になることができた。
- 加盟団体間での資料の貸し借りで発生する費用は、基本無料としている。水平社博物館は、地域と連携して出前授業などの取組を行っている。
- 水平社博物館は、2015年に日本の機関として初めて国際人権博物館連盟（FIHRM）に加盟した。以降、水平社創立の思想を世界中の人々と共有する取り組みを展開している。
- 人権ネットHPを運営しているが、会員専用サイトはない。

#### ⑤ 課題と工夫

- 事務局の負担軽減策であった持ち回り制がスムーズにいったいるため、現状は特段課題を抱えていない。事務局を持ち回り制にすることで、ネットワークへの主体性を高めている。
- 事務局の代表を担うことや実働が困難な団体もあることから、事務局は複数館で構成している。設置目的に沿った形で、各団体が無理なく関わられるような運用体制を整えている。
- 行政団体は異動して間もない担当が人権ネット事務局担当者となることが多いが、定型化した業務と引継ぎで問題なく運用できている。

#### ⑥ 成果と評価

- 成果目標や評価などは設定していない。民間企業からの支援等も現状はない。

## 第4章 | 考 察

## 考察

本調整によって得られた成果について概要を記す。

### 1. 諸外国の状況比較

今回の海外事例調査により、諸外国のスポーツミュージアムは総じて「ネットワーク化」「専門性の確保」「明確な方針・基準」に基づいて活動していることが確認できた。

#### ① ヒト（人材・組織・連携）

調査対象6館のうち4館がオリンピックミュージアムネットワーク（OMN）に加盟し、共通認識とプログラムのもとで活動し、共通プラットフォームを通じて情報発信していることが明らかとなった。米国野球殿堂博物館は、殿堂同士のネットワークやスポーツ・ヘリテージ・アソシエーション（ISHA）に加盟し、独自のネットワークにより、多角的な運営を行っていることがわかった。また、各館は企業や地域と連携し、社会教育活動を積極的に展開していて、地域とのネットワークも積極的に構築していることが確認できた。人材面では、専門分野ごとにチームを編成し、専門性を高める体制を整えていることが伺えた。

#### ② モノ（資料・収蔵・展示）

各館は収集方針や明確な基準を設け、規則的かつ柔軟に資料受入れを実施している。韓国では国として基準が整備され、寄贈・寄託・収集の手続きが統一されていた。総じて、海外では収集方針や分類の標準化が進み、貸借や展示更新が活発であることが確認できた。

#### ③ カネ（財源・資金調達）

米国は補助金に依存せず、入館料・物販・寄付を主要財源とする自立モデルを確立している。寄付文化が根付いており、寄付を促す仕組みが広く存在していた。スイスはIOC予算による全額運営、イタリアは完全民間運営でスポンサー獲得を重視している。オーストラリアはメルボルンクリケットクラブの会員費を基盤とし、政府支援は限定的である。一方、韓国は国民体育振興基金による全額補助で原則無料入館を維持している。韓国以外は国費に頼らず、自立モデルを構築していることが確認できた。

#### ④ 情報（知識・データ・発信）

各館は独自の広報戦略を策定し、メディアやSNSを積極的に活用して情報発信を行っている。デジタル化には課題があるものの、積極的に推進していることが確認できた。

### 2. 国内調査を踏まえたスポーツミュージアム同士のネットワークの方向性について

国内の先行ネットワークである「ブンカラ」と「人権ネット」の調査から、スポーツミュー

ジウムが目指すべきネットワーク像は次のとおりである。

#### 第一に、共通理念と参加の間口

ブンカラは専門職員の有無にかかわらず広く加入を認め、資料情報の集約・共有・共同事業を推進している。人権ネットは、横断的な連携で人権教育・啓発に寄与している。スポーツミュージアムのネットワークは「スポーツの歴史・文化・価値を次世代に継承し、地域社会及び国際社会におけりスポーツの意義を広く伝えることを通じて社会に貢献する」ことを中核理念とし、テーマや規模の多様性を包摂するべきである。

#### 第二に、事務局体制と運営の平準化

ブンカラは中核館が事務局機能を担い、中核館を中心とした運営を実施している。人権ネットはブロック持ち回り制で負担を分散している。スポーツミュージアム同士のネットワークでは、中核館が基盤業務を担いつつ、地域ブロックの補助事務局を持ち回りで設けることも考えられるが、小規模な団体でも参画できる仕組みを構築する必要がある。

#### 第三に、事業設計（人材育成・共同研究・展示連携）

ブンカラのワークショップ重視の研修は有効であり、スポーツミュージアム同士のネットワークでも全国カンファレンスやテーマ別ワークショップを定例化することが望ましい。資料貸借は人権ネットの慣行を参考に、輸送・保険費用は合理的に負担することが適当である。

#### 第四に、デジタルアーカイブの整備

スポーツ界全体として、どこにどんな資料があるのかわからないという実態がある。この状況を解決するため、ネットワークを活用し、秩父宮記念スポーツ博物館が令和8年度に公開予定のデジタルアーカイブシステムと連動し、共通メタデータを策定し、段階的にデジタル化の公開を推進していく必要がある。

#### 第五に、財源とガバナンス

初期は文化庁補助事業を活用し、今後、年会費（館規模に応じた階層制）＋助成金・寄付・スポンサー＋イベント収入等により自立度を高めることが望ましい。

#### 第六に、広報と社会的インパクト

学校・教育現場へのアプローチ、観光・地域振興との連携、アスリートや地域の語り部による発信を組み合わせる。共通PRツール等を整備し、加盟館の発信力を強化することが必要である。

### 3. まとめ

本調査により、諸外国の活動状況とネットワークの必要性を確認できた。国内の先行事例からは、共通理念の明文化、中核館主導型運営、関係性を育むワークショップ、共同展示、簡素で持続可能な財務・事務モデルなど、スポーツ領域に適用可能な知見が得られた。

また、有識者と意見交換する中では、ネットワークを構築する上で、「事務局を輪番制にしないこと（持ち回りだとその場しのぎの対応が続いてしまう）」、「ネットワークのミッションを明確にすること」、「資金を確保すること」の3点が継続するために大事なことであるというアドバイスをいただいた。比較的小規模な団体が多い中で、今後継続していくためには、ネットワークを法人化することも必要である。

今後、日本のスポーツミュージアム同士のネットワークは、①共通理念の確立、②人材育成・研修、③スポーツ資料の見える化、④共同研究・展示連携、⑤財源の多角化とガバナンス強化、⑥広報と社会的インパクト創出等を柱に段階的に進め、これにより、スポーツミュージアムは単なる展示施設を超え、スポーツ文化のハブとして、教育・研究・観光・コミュニティ形成に広く貢献することが期待できるものと考えられる。

# おわりに

## 1. 連携団体参加者からの所感

### (1) 札幌オリンピックミュージアム

館長 阿部 雅司

今回のスイスおよびイタリアでのミュージアム視察を通して感じたことを報告する。

スイス（ローザンヌ）のオリンピックミュージアムにはこれまでに3度訪れているが、以前よりデジタル化が大きく進み、来館者を飽きさせない展示内容になっていると感じた。

また、新たにeスポーツの展示スペースが設けられ、IOCの取り組みを反映した構成になっているように思った。

eスポーツエリアの入口には、任天堂のマリオやパックマンなどの展示があり、その先にはボート、自転車、カーレースなどのバーチャルスポーツに関する展示や体験コーナーが充実しており、非常に力を入れている印象を受けた。

日本のスポーツミュージアムにおいても、今後はeスポーツを取り入れていく必要があると考える。しかし、タイトルによっては戦争を模したものもあり、オリンピックにふさわしくないという意見もあるため、日本での導入については慎重に検討を進めるべきだと思う。

また詳細は分からないが、2027年にサウジアラビアで開催予定だったeスポーツの新設大会「オリンピック・eスポーツ・ゲームズ」が中止になったとのことで、今後のIOCの動向を注視していきたい。

イタリアに移動し、ミラノ中央駅に到着した際には、駅そのものが遺跡のような壮大な建築で驚かされ、街全体も博物館のようにアート性が高く、素直に感動した。

オリンピック開催まで2か月余りとなる中、観光地ではポスターなどを掲示しPRしていたが、それ以外の場所ではオリンピック関連のアピールが少なく、地元の盛り上がりはあまり感じられなかった。

サンシーロ・ミュージアムでは、スタジアムの歴史や、その時代に活躍した選手たちが分かりやすく展示されており、ストーリー性のある非常に良い内容だった。

加えて、ミュージアムおよびスタジアムをご案内いただいた Mr. Yuki Ibaraki さんの説明が大変すばらしく、心に響いた。

今回のスイス・イタリア視察において、オリンピックミュージアムおよびサンシーロ・ミュージアムでは、私たちの質問にも親切丁寧にご対応いただき心より感謝申し上げます。

また、現地での打ち合わせやチケットの事前手配などをしていただいた三澤さんのおかげで、短期間のハードスケジュールではあったが、非常に有意義な視察となったことを報告する。

## (2) 中京大学スポーツミュージアム

副館長・教授 亀井 哲也

米国オリンピック・パラリンピック博物館で参考になった点を三つあげる。

第一に、この館がインクルーシブな、すなわちユニバーサルデザインを取り込んだアクセスシビリティの高い施設であり、日本で語られるユニバーサルミュージアムを体現している点である。来館者をすべて最上階までエレベーターで上がった後、緩やかなスロープを下らせる観覧動線は、高齢者やベビーカー、車椅子での来館者にも優しい。エレベーターの表示では3階建てとなっているが、設計図面上では12のフロアからなるという。建築面のみならず、展示ソフト面でも、視覚・聴覚障害対応の工夫があった。この点はオリ、パラが一体となったアメリカの体制、米国オリンピック・パラリンピック委員会の存在が大きく影響しているであろう。

第二に、アミューズメント性が高い点である。これは、博物館に人々を呼び込み、楽しませ、さらなる来訪を促すために必須の要素である。同館では、数多くのモニターで競技や開幕式の華やかな映像を見せ、インタラクティブな装置でオリンピックおよびパラリンピックの各種競技そのものを体験させることで、多くの来館者の満足度を高めている。実際、視察時にもたくさんの来館者が映像に目を留め、スタッフのサポートを受けながら競技の模擬体験を楽しんでいた。同館では最新鋭の機器を効果的に用いて、双方向的なアミューズメント性を高めており、開館5年目でも機器の新鮮さはまだ損なわれてはいなかった。

しかし、展示構成を見ると、歴代のオリンピックトーチとメダルに依存しすぎていると感じた。トーチとメダルは確かにオリンピックを象徴し、万人受けするものであり、一堂に陳列された姿は展示の華となっていたが、コレクションの秀逸さを誇示するばかりで、その背景にまで踏み込まれていない物足りなさを感じた。競技具の展示も、ひと通りはあるものの、もっとモノひとつひとつの意味や背景を重視した展示を求めてしまう。こうした印象や不満を抱く大きな理由は、おそらく研究施設としての不十分さにあるのであろう。「研究」が博物館の重要な機能のひとつであるにもかかわらず、展示資料の多くを米国オリンピック・パラリンピック委員会から借用し、自前で収蔵する資料も少ない上に学芸員一人という体制は、全米を代表する名称にしては、残念である。

その中で、2025年1月のロサンゼルス森林火災で焼損した競泳米国代表ゲリー・ホール・ジュニア氏の五輪メダルを、IOCが再発行した五輪メダルと一緒に並べた展示は、極めて話題性と時事性があり、秀逸に思った。こうした展示を可能にしたのは、選手の若手時代、まだ目立った成績のない時代から、開館準備中の同館が選手との親密なつながり、ネットワークを形成していたからであり、第三の大いに見做すべき点である。

今回の国外事例調査への参加は、極めて有意義なものであり、今後の活動に反映させたいと考えている。

### (3) NPO 法人わかやまスポーツ伝承館

館長 江川 哲二

10月に初めて海外の博物館視察に同行させて頂き、感謝申し上げたい。

今回は、アメリカニューヨークの野球殿堂博物館とジャッキー・ロビンソン・ミュージアムを主に視察したが、ニューヨークは広いと感じた。クーパーズタウンにある野球殿堂博物館からニューヨーク市内まで、車で高速道路を使って約4時間もかかり、広さを痛感した。

まず初めに野球殿堂博物館については、規模の大きさ・運営スタッフの多さ・きめ細やかな展示に感動した。大リーガーのユニフォーム・バット・スパイク等たくさん展示されていたが、なかでも私が感動したのは、ショーケースに展示されていた「ベーブ・ルース」の展示で、当時のネクストバッターボックスに立っている「ベーブ・ルース」の写真があり、その前にマネキンに着せたユニフォームがあったが、なんと後姿のユニフォームズボンのシワが写真と同じように細工されており、そのこだわりに驚いた。また、全体で150名のスタッフがいて90%がフルタイム、それ以外がパートタイマーであり、特別なイベントがある際は、100人ぐらいのボランティアをお願いしているとのことで、規模の大きさを感じた。

ジャッキー・ロビンソン・ミュージアムへ視察にも伺った。1947年にジャッキー・ロビンソンがメジャーリーグの黒人選手としてデビューしたそうだが、当時は人種差別があり、開幕前のチームメイトのなかにはロビンソンとプレイするのを嫌がって移籍した選手もいたと言う話も伺うことができた。ロビンソンが着用していたユニフォーム等の展示があり、功績を後世に伝えるパネルがあり良い展示場だと思った。また、ミュージアム専属スタッフ4名、その他パートタイマーが7人で、広くPR出来ていないとのことだったが、学校の遠足なども多く年間35,000人の来館者があると言うことを聞き、当わかやまスポーツ伝承館としても参考としたい。

最後にこれから設立されるネットワークについて、国内のスポーツミュージアム同士が連携・情報交換・展示物の貸し借り等をし、また海外のミュージアムとも連携し、国民にスポーツに対する機運向上を図り、スポーツ文化・歴史等を紹介することで、各都道府県のスポーツミュージアムが活性化することを望みたい。

### (4) 日本オリンピックミュージアム

マネージャー 下湯 直樹

今回の事業で調査したオーストラリアスポーツミュージアムは、オーストラリアのスポーツ文化の中心地であるメルボルン・クリケット・グラウンドの敷地内に位置している。運営母体はメルボルンクリケットクラブであるが、国立博物館としての機能も有しており、スポー

ツそのものよりも「スポーツを通じて語るオーストラリアという国のストーリー」を重視した社会史的要素を含む施設を目指して設置されている。また、組織体制は博物館、図書館、アーカイブの3チームで構成されており、キュレーター（企画・運営統括）、収集担当、保存管理、教育・来館者対応といった専門分野ごとに担当制を敷いている。集客目標は過去5年のトレンドを基に設定されており、運営費の大部分はクリケットクラブの約15万人の会員からの会費および試合・イベント収入により賄われているため、前年度の実績に基づく安定的な予算確保がなされている。このように、他のスポーツミュージアムとは異なり、かなり特殊な事例であるが、クリケットをはじめとするスポーツがオーストラリアの歴史的背景と深く結びついており、ミュージアム自体も国民の生活や文化にとって不可欠な要素となっている。また、2018年以降、オーストラリアとニュージーランドのスポーツミュージアム間のネットワークが構築され、人材育成として年1回のカンファレンスを通じた実務的なトレーニングが実施されていた。

我が国におけるスポーツミュージアムのネットワークの構築は当事業の進展により諮られることを期待するが、上記のような継続的な実務面での情報共有とともに研修機会の提供、また並行してICOM ICMAHの「スポーツ博物館の博物館学的な側面に関する理論的研究は、他の種類の博物館と比較して非常に限られている」という指摘の通り、実務を支える理論的な研究も進めていくべきである。

また、オーストラリアスポーツミュージアムが国のスポーツ政策と間接的かつ補完的な関係にあり、政府機関と連携しつつ、主にスポーツの歴史と文化の保存・普及という役割を通じて、国のスポーツ振興戦略に貢献しているが、わが国のスポーツ博物館は未だその役割を担っていないのが実情である。例えばスポーツ庁、文化庁及び観光庁がスポーツや文化芸術資源の融合により、新たに生まれる地域の魅力を国内外に発信し、訪日外国人旅行者の増加や国内観光の活性化を図るために締結された包括的連携協定が令和7年2月に改定されたが、依然としてスポーツ博物館が「する」「みる」「ささえる」拠点の一つとして挙げられていない。本来、スポーツ博物館とはスポーツ資料を収集、保管、活用しながらアスリートやスポーツ文化を「ささえる」役割を担うべきものであるが、各スポーツ博物館の設立経緯や共通理念がないため、点としての活動に留まり、社会的なインパクト不足が否めない。

以上のようにオーストラリアスポーツミュージアムの調査を通じて、ネットワーク構築の必要性とともに人材育成、理論的研究、国策との連動といった課題も浮き彫りになり、ネットワーク構築後は会則の「スポーツの歴史・文化・価値を次世代に継承し、地域社会及び国際社会におけるスポーツの意義を広く伝えることを通じて社会に貢献する。」といった共通理念のもと各団体が意識的に課題解決に向けて活動していくことが求められる。

## (5) 公益財団法人野球殿堂博物館

事業部次長 主任学芸員 関口 貴広

### ■ National Baseball Hall of Fame and Museum / 米国野球殿堂博物館

個人的には2004、2016年に続き3度目の米国野球殿堂博物館への訪問だった。訪問の度に同館学芸部門スタッフらにヒヤリングの時間を頂き、館内の表も裏もご案内いただいております、今回も同じように丸一日かけてご対応いただいた。

同館では、2025年のイチロー氏の殿堂入り資格初年度にあわせて、常設展示の一部を改装し、本年7月に日米の野球交流史をテーマとした新たな展示【「YAKYU | BASEBALL: THE TRANSPACIFIC EXCHANGE OF THE GAME」野球とベースボール 太平洋を越えた日米の野球交流】をオープンした。当館には2024年初めに上級学芸員のトム・シーバー氏より連絡があり、同展企画にあたっての訪日調査の協力依頼を受けた。これを受け、国内の複数の館の担当者を紹介し、同年3月下旬の視察チームの来日に際しては、当館での視察案内やコレクション紹介に加え、甲子園球場視察の調整や案内も行った。その後、正式に同展へのコレクション出品依頼があり、当館としては2度目の、米国殿堂博への資料出品を行っている。

こうした経緯もあり、担当学芸員（現在はコレクション及びアーカイブ担当部長）RJ・ララ氏が窓口となり、今回の視察を快く受け入れて頂いた。

9年前の前回訪問時から、1階はエントランス、2階はシアター、シアター横の展示室（MLB30 球団展示⇒同年の顕彰者展示コーナー）が改装され、歴史展示では新たな展示として、ラテン野球と、アフリカ系米国人野球史の展示室が加わった。3階ではYAKYU | BASEBALLに加え、MLB30 球団の展示室、ベースボールカード、ボブルヘッドの展示室が加わった。そして、訪問時はショップの拡張工事が行われていた。前回訪問時は入口が改装中で、常にどこかの工事が行われている。今回のYAKYU | BASEBALLも当座5年間の予定とのことで、館内各所を中長期的な計画のもとに行っていることがうかがえる。継続的に施設や展示のリニューアルを実施することの重要性を感じた。

### ■ Jackie Robinson Museum / ジャッキー・ロビンソン ミュージアム

事前に米国野球殿堂博物館にNYC周辺で資料を貸出している施設を伺ったところ教えて頂いた施設のひとつで、同館を通じて運営団体担当者に視察協力を依頼した。

同館は野球選手としてのジャッキー・ロビンソンだけを取り上げるのではなく、彼の人生を通してアメリカの抱える人種問題などに目を向けてもらえるような展示構成にしているとのこと。同館においても関係団体との連携などについてヒヤリングすることができ、参考となった。

### ■ ネットワーク参加にあたり

当館ではこれまでも、国内の歴史系の博物館などで野球やスポーツをテーマとした企画展

が開催される際は、資料の貸出しのみならず、プロ野球やアマチュア野球の各団体の連絡先の紹介など、野球界への窓口としての役割も担ってきた。今回、国内のスポーツミュージアムのネットワーク事業に参加するにあたり、こうした特性を生かして活動に資することができればと考えている。

## (6) 秩父宮記念スポーツ博物館

コーディネーター 黒川 仁美

### ① 米国オリンピック・パラリンピック博物館 (USOPM)

USOPMは「オリンピック・パラリンピック」という名称でありながら、オリンピックシンボルの使用が認められないという特殊な施設である。博物館の建設は、コロラドスプリングス市が都市開発プロジェクトとして進めてきた事業で、インフラ整備や観光促進など様々なサポートのもとに地域経済と文化振興の中核として位置づけられており、建物のデザイン、室内の設備等最新のものが設置されている。コロナ禍（2020年7月）にオープンを迎えたこともあり、来館予定者数については、当初の予想を大きく下回っており、運営当事者が苦労していることがうかがえた。また、国内外の博物館連携については様々な検討がなされている様子であったが、学芸員が1名のみという厳しい状況であり、実際に事業等を進めていくことは容易でないことが伝わってきた。

### ② オリンピックミュージアム (TOM)

TOMはスイス・ローザンヌの湖畔に位置し、レマン湖とアルプスの山並みを一望できる絶好のロケーションにあり、「文化と自然の融合」を体感できる場所となっている。展示については、オリンピック精神の「平和と調和」を象徴する古代ギリシャの競技から近代オリンピックの誕生までを体系的に紹介し、クーベルタンの理想や大会の進化を理解できる構成となっている。大規模な改修ではなく短いスパンで新たな展示構成を行うことで、何度も訪問したいと思える施設となっている。単にオリンピック大会の軌跡を追うだけでなく、文化的価値を提示しながら来館者にインタラクティブな体験を提供し、スポーツの楽しさを味わえる仕掛けも備えている。IOC本部のあるローザンヌに位置することも象徴的であり、スポーツファンのみならず歴史や芸術に関心を持つ人々にとっても魅力的な博物館であると感じた。

### ③ サン・シーロ・スタジアム (正式名称：ジュゼッペ・メアッツァ・スタジアム) ミュージアム

ミラノ西部に位置するイタリア最大のスタジアムであり、サッカーの名門インテルとACミランの本拠地として「現代のコロッセオ」と呼ばれるにふさわしい存在である。数々の歴史的な試合や国際大会を開催してきたこの場所は、ミラノ市民にとって単なる競技場に留ま

らず聖地になっている感覚がある。このスタジアムは、来年2月に開催されるミラノ・コルティナ 2026 冬季オリンピックの開会式の舞台として100周年を迎えることになっている。過去の栄光と未来への挑戦をつなぐ象徴的な出来事であり、スポーツと文化の融合を体感できる非常に魅力的なスタジアムといえる。新スタジアムへの移転前で派手な演出こそなかったものの、このミュージアムは、直前に訪れた最先端技術を駆使したFIFAミュージアムと比較すると、母国語による丁寧な展示解説、チームの歴史を深く学べる体験は、来館者にとってより印象深くその価値を実感できる貴重な機会となろう。

#### ④ 大韓民国 国立スポーツ博物館

KSPO（ソウルオリンピック記念 国民体育振興公団）が運営する国立スポーツ博物館は2026年9月の開館に向け最終段階に入っている。4階建ての建物には企画展示室、子供博物館、図書館、常設展示室、ソウルオリンピック記念館、そしてその他体験展示も含めて様々な工夫が施されている。また、保管庫も充実した設えになっている。他方、実物資料の位置づけやスポーツ遺産の分類等、本館と共通する課題も多く見受けられた。ただし、スポーツ遺産がすでに文化遺産庁により「宝物」あるいは「国家登録文化遺産」への登録がなされるなどスポーツ遺産の価値向上につながる取組は我が国よりかなり進んでいると思われる。母体となる組織体制について共通点が多いことから、今後、両国内におけるスポーツ遺産の取り扱いのみならず、様々な分野での情報交換や協力関係を築いていくことが重要であると感じた。

上記4館の訪問を通じて来館者数の増加と学芸員を含む専門職員の増員が共通の課題であることが示唆された。さらに、その解決には情報共有が不可欠であることから、「スポーツミュージアムネットワーク」の役割と重要性を改めて強く認識する機会となった。

## 本事業による調査体制

### 中核館

秩父宮記念スポーツ博物館

### 連携団体

中京大学スポーツミュージアム	館長	來田 享子
	副館長	亀井 哲也
わかやまスポーツ伝承館	館長	江川 哲二
日本オリンピックミュージアム	マネージャー	下湯 直樹
札幌オリンピックミュージアム	館長	阿部 雅司
	学芸員	山谷 和正
野球殿堂博物館	事業部次長	関口 貴広
	事業部司書	永沼 里菜子

### 有識者

国立科学博物館	理事(兼)副館長	栗原 祐司
---------	----------	-------

### 事務局

秩父宮記念スポーツ博物館	館長	大西 啓介
	推進役	末木 克昌
	主幹	三澤 亮太
	主幹/学芸員	新名 佐知子
	主任専門職	荒谷 吉恵
	主任/学芸員	山本 洋
	主任/学芸員	村上 佳奈子
	学芸員	大参 翔平
	職員	山田 かおり
	コーディネーター	黒川 仁美

令和7年度 Innovate MUSEUM 事業  
令和7年度 スポーツ文化共創「つながる」プロジェクト事業  
「国内外スポーツミュージアム事例調査」報告書

発行 令和8年1月

編集 独立行政法人日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館



Innovate MUSEUM 事業  
スポーツ文化共創「つながる」プロジェクト